

## あいまいな日本の私

大江健三郎さんが亡くなった。梅田の紀伊國屋書店には「追悼コーナー」が設置されていると思い、探してみたが見つからなかった。店員さんに聞くと、とくにコーナーは設置していないが、新書や文庫は多めに並べてあるとのことだった。とりあえず新書を2冊購入した。

ひとつは写真の『あいまいな日本の私』。1995年に第1刷発行、2018年第34刷発行となっている。目次を紹介する。

あいまいな日本の私 癒される者 新しい光の音楽と深まりについて  
「家族のきずな」の両義性 井伏さんの祈りとリアリズム 日米  
の新しい文化関係のために 北欧で日本文化を語る 回路を閉じた日  
本人でなく 世界文学は日本文学たりうるか？



本書のタイトルでもある最初の「あいまいな日本の私」は、1994年12月7日にストックホルムで行われたノーベル賞受賞記念講演である。かなり前に読んだ記憶はあるが、なんだか新鮮さを感じて再読した。とりわけ印象的なところを記録しておきたい。

「国家と人間をともに引き裂くほど強く、鋭いこのあいまいさは、日本と日本人の上に、多様なかたちで表面化しています。日本の近代化は、ひたすら西欧にならうという方向づけのものでした。しかし、日本はアジアに位置しており、日本人は伝統的な文化を確乎として守り続けもしました。そのあいまいな進み行きは、アジアにおける侵略者の役割にかれ自身を追い込みました。」

「二十世紀がテクノロジーと交通の怪物的な発展のうちに積み重ねた被害を、できるものなら、ひ弱い私みずからの身を以て、鈍痛で受けとめ、とくに世界の周縁にある者として、そこから展望しうる、人類の全体の癒しと和解に、どのようにディーセントかつユマニスト的な貢献がなしうるものかを、探りたいとねがっているのです。」

その他は大学などでの記念講演である。大江さんの講演には、共通したものがある。文学者としての才能を活かした問題提起だけでなく、個人的な話から問題に迫っている。最初の講演でも「私の文学の根本的なスタイルが、個人的な具体性に出発して、それを社会、国家、世界につなごうとするものなのです」。「家庭を持った私に生まれた最初の子供は、一かれに light という意味の、光という名をつけました一知的な発達に障害を担っていました。幼い時、かれは野鳥の歌にのみ反応を示して、人間の声、言葉には無反応でした」と。光さんが作曲を進めるようになり、「新しい光の音楽と深まりについて」語る講演が、とりわけ印象深かった。

それと大江さんの講演には、いつもユーモアがあった。この点だけは、私の講演にも当てはまる。ただし、私はダジャレに近いものだが、大江さんには「品」があった。

(2023年4月8日)